

え ひ め  
愛比売

平成20年度 年報

2009

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター







## 序 文

財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターは、愛媛県内における埋蔵文化財に関する調査研究および県民の埋蔵文化財の保護思想の涵養と普及を図ることを目的として昭和52年に設立され、事業者からの委託を受け、発掘調査を行うとともに現地説明会や遺跡展等を開催し、多くの方々の参加をいただいております。また、関係諸機関とも積極的に協力し、埋蔵文化財に対する保護思想の普及や県内外への情報発信に努めているところでございます。

このたび、当センターが昨年度に実施した委託事業（発掘調査及び整理・報告書作成）および自主事業の概要をとりまとめた平成20年度年報「愛比売」を刊行することとなりました。

本書では受託事業として発掘調査を実施した11遺跡の概要を掲載しています。平成17年度から発掘調査を継続しています朝倉下下経田遺跡の調査では弥生時代の大溝や古墳時代のカマド付竪穴建物が検出されました。また松山市北井門遺跡の調査では平成19年度の調査で見つかった溝の続きを確認し、さらに縄文時代後・晩期の竪穴建物などの遺構が検出されました。このように調査件数は少ないものの県内各地で貴重な調査成果をあげることができました。

整理・報告書作成では6冊の発掘調査報告書を刊行することができました。奈良時代前後の掘立柱建物群が検出された西条市池の内遺跡をはじめ、多量の古式土師器が出土した今治市杉田池田遺跡など、刊行された各報告書は日本の考古学研究の進展に大きく寄与するものと考えられます。

また本年度は愛媛県の緊急雇用対策事業の一環として、新たに作業員を雇用し、県有出土品の整理作業を行いました。県有出土品は、この作業によって、県民をはじめ、より多くの方々にご活用いただけるようになりました。

さらに本書では、自主事業として行った考古資料特別展や発掘調査に伴う現地説明会などの普及・啓発事業の概要についてもまとめております。

本書が地域における歴史や考古学研究の資料としてご活用いただき、さらに県民の方々の身近にある埋蔵文化財保護の重要性に対するご理解と地域の歴史への関心に役立つことができれば幸いと存じます。

最後になりましたが、各事業の実施にあたり、ご指導、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者のみなさまに厚くお礼を申し上げます。

平成21年6月

財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター  
理事長 藤 岡 澄

# 目 次

I 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの組織及び事業の概要	1
I - 1 組織の概要	2
1. 設立趣意書	2
2. 沿革	2
3. 事務所所在地	3
4. 役員名簿	3
5. 平成 20(2008) 年度組織及び職員	3
I - 2 事業の概要	4
1. 委託事業 ( 寄附行為第 4 条第 1 号 )	4
2. 普及・啓発事業 ( 寄附行為第 4 条第 2 号 )	4
II 事業報告	7
II - 1 事業の概要報告	8
II - 2 発掘調査を実施した遺跡及び県有出土品整理事業の概要	11
1. 朝倉下 経田遺跡	12
2. 朝倉下 下経田遺跡	13
3. 国分壱町地遺跡	15
4. 国分向遺跡 2 次	16
5. 石手村前遺跡	17
6. 道後町遺跡 3 次	18
7. 此花町遺跡	19
8. 北井門遺跡 2 次	20
9. 北井門遺跡 3 次	22
10. 岩倉城跡 2 次調査	24
11. 中津倉城跡	25
県有出土品整理事業	26
II - 3 刊行した報告書の概要	27

## 例 言

- 1 本年報は、財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターが平成 20(2008) 年度に実施した業務の記録である。
- 2 概要の記載は発掘調査を実施した遺跡単位とし、東予・中予・南予の順に掲載した。
- 3 遺跡位置図は国土地理院発行 25,000 分の 1 地形図の一部を使用した。
- 4 各遺跡の調査期間は現場作業開始から終了までとした。
- 5 各事業・各遺跡の概要の執筆者名は文末に記している。
- 6 概要中の図の略号は次の通りである。  
SA：柵列 SB：掘立柱建物跡 SD：溝 SE：井戸 SI：竪穴建物跡 SK：土坑  
SP または P：柱穴・小穴・ピット SR：自然流路 ST：土坑( 壙 ) 墓 SU：集石遺構  
SX：性格不明遺構 SM：古墳
- 7 本年報の編集は柴田昌兎が行った。

# I 財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センターの 組織及び事業の概要

## I - 1 組織の概要

### 1. 設立趣意書

文化遺産は、県民が長い歴史の中においてはぐくみ育ててきた貴重な財産であり、この貴重な財産を将来にわたって長く保存し、後世に伝えることは、歴史と風土に根ざした豊かな社会を維持発展させるうえにきわめて重要である。

特に、埋蔵文化財の保護は、我が県の土地開発の発展の中で、今日ますます大きな問題になっている。

当法人は、埋蔵文化財の調査研究を行うとともに埋蔵文化財の保護思想の涵養と普及を図り、地域文化の振興に寄与することを目的として設立するものである。

### 2. 沿革

昭和 52(1977) 年 5 月 24 日	発起人会議開催される。
5 月 31 日	愛媛県教育委員会へ設立許可申請書を提出する。
6 月 9 日	愛媛県教育委員会から設立許可される。 事務局を松山市堀ノ内官有地(愛媛県立歴史民俗資料館内)に置く。
6 月 20 日	松山地方法務局へ設立登記申請する。
8 月 8 日	第 1 回理事会を開催する。
12 月 8 日	第 1 回評議員会を開催する。
昭和 53(1978) 年 1 月 1 日	調査員 2 名を採用する。
4 月 1 日	伊予郡砥部町へ整理事務所を借地により開設する。
昭和 55(1980) 年 4 月 1 日	県から教員が調査員として派遣される。
7 月 18 日	事務局を愛媛県庁第二別館へ移転する。
昭和 57(1982) 年 8 月 1 日	徽章を制定する。
平成元(1989) 年 4 月 1 日	県から担当主任が派遣される。
平成 2(1990) 年 4 月 1 日	事務局を県庁第一別館へ移転する。
平成 3(1991) 年 4 月 1 日	温泉郡重信町へ整理事務所を移転する。
平成 8(1996) 年 3 月 11 日	衣山整理事務所を開設する。
平成 9(1997) 年 4 月 1 日	組織改正により 2 課 3 係を新設し、総務課長、調査課長、調査第一係長、調査第二係長、調査第三係長を置き、県から派遣 2 名が増員される。
平成 12(2000) 年 4 月 1 日	衣山整理事務所を閉鎖し、重信整理事務所に統合する。事務局を県庁第二別館に移転する。
平成 14(2002) 年 4 月 1 日	道後公園(湯築城跡)の管理運営を県から委託される。組織改正により総務課企画普及係を設置、事務局を県庁第一別館に移転する。
平成 15(2003) 年 4 月 1 日	事務局を愛媛県三番町ビルに移転する。
平成 17(2005) 年 8 月 8 日	事務局と重信整理事務所を統合し、松山市衣山に移転する。
平成 18(2006) 年 3 月 31 日	指定管理者制度導入に伴い、道後公園(湯築城跡)の運営管理を県に返還。
平成 18(2006) 年 4 月 1 日	組織改正により調査課 3 係制から 2 係制へと移行する。

### 3. 事務所所在地

愛媛県松山市衣山4丁目68番地1号

### 4. 役員名簿

平成20(2008)年度

役員	理事長	藤岡 澄	県教育委員会教育長	
	常務理事	日野孝雄	(財) 県埋蔵文化財調査センター参事	
	理事		下條信行	県文化財保護審議会委員
			内田九州男	県文化財保護審議会委員
			白石勝也	県町村会会長
			前園実知雄	奈良芸術短期大学教授
			名本二六雄	愛媛考古学協会会長
	監事		森田邦博	愛媛銀行常勤監査役
			土居貴美	松山市教育委員会教育長
	評議員		赤松 環	県生涯学習センター嘱託研究員
		寺澤房和	東温市教育長	
		岡野 昇	県市町会事務局長	
		上甲一光	県高等学校長協会会長	
		濱田健介	県教育委員会事務局文化スポーツ部文化財保護課長	

### 5. 平成20(2008)年度組織及び職員

**総務課**  
 参事（兼常務理事） 日野孝雄  
 総務課長 竹田真二  
 専門員 窪田優彦  
 臨時補助員 河野有美 清家衣利子（7月退職） 藤村美由紀（7月就職）

**調査課**  
 調査課長 岡田敏彦  
**調査第一係**  
 調査第一係長 中野良一  
 主任調査員 柴田昌兎 多田 仁  
 調査員 山内英樹（3月31日退職） 松村さを里  
 遠藤 武 村上才一 深川範人  
 嘱託員 柴田圭子 松本美香 藤本清志  
**調査第二係**  
 調査第二係長 眞鍋昭文  
 主任調査員 西川真美 土井光一郎 三好裕之  
 調査員 池尻伸吾 堀元数義 兵頭 勲 福山裕章  
 藤井崇史（6月退職）  
 嘱託員 今泉ゆかり 岡美奈子 大野由美子

## I - 2 事業の概要

### 1. 委託事業（寄附行為第4条第1号）

平成20(2008)年度埋蔵文化財調査事業

委託者	事業名称	面積 (㎡)		金額 (円)	備考
		発掘	整理		
国土交通省	松山管内	12,200	6,140	109,116,000	
	大洲管内	1,300	0	11,361,000	
愛媛県	桜井山路線ほか	7,170	7,636	179,344,500	緊急雇用対策関連事業を含む
西条市教育委員会	大規模商業施設建設	0	12,914	24,360,000	
合	計	20,670	26,690	324,181,500	

平成20(2008)年度埋蔵文化財調査(発掘調査)一覧

No.	遺跡名	所在地	調査原因	調査係	所属時期
1	朝倉下 経田遺跡	今治市朝倉下甲	国道196号今治道路	調査第一係	弥生時代中期末 ～古墳時代後期
2	朝倉下 下経田遺跡	今治市朝倉下甲	国道196号今治道路	調査第一係	弥生時代～中世
3	国分壱町地遺跡	今治市国分	県道桜井山路線改良工事	調査第二係	弥生時代前期
4	国分向遺跡2次	今治市国分	県道桜井山路線改良工事	調査第二係	古代・中世
5	石手村前遺跡	松山市石手	県道六軒家石手線みち再生事業	調査第二係	古代・中世
6	道後町遺跡3次	松山市道後町	県道六軒家石手線電線地下埋設工事	調査第二係	中世
7	此花町遺跡	松山市此花町・持田町	(国)317号みち再生事業	調査第二係	古代・中世
8	北井門遺跡2次	松山市北井門町	松山外環状線建設	調査第一係	縄文時代～中世
9	北井門遺跡3次	松山市北井門町	県道久米垣生線建設	調査第二係	縄文時代～弥生時代
10	岩倉城跡2次調査	宇和島市三間町曾根	四国横断自動車道建設	調査第一係	中世
11	中津倉城跡	宇和島市高串	四国横断自動車道建設	調査第一係	中世

### 2. 普及・啓発事業（寄附行為第4条第2号）

考古資料特別展

1階展示室で企画展を開催した。

「平成20年度遺跡速報展『いにしへのえひめ '08』」

前期(報告書編) [平成20年4月28日～6月27日] 見学者:130名

後期(発掘調査編) [平成20年7月14日～9月19日] 見学者:128名

「平成20年度後期テーマ展『時代のものさし-古墳時代-』」

[平成20年10月27日～平成21年2月29日]

四国地区埋蔵文化財センター巡回展

四国四県と松山市の埋蔵文化財センターが共催し、次の事業を四国内4会場で実施した。

「発掘へんろ-遺跡でめぐる伊予・土佐・讃岐・阿波-」

愛媛会場：松山市考古館 [平成20年4月19日～7月13日] 見学者:3,390名

高知会場：高知県埋蔵文化財センター [平成20年8月1日～10月31日] 見学者:1,224名

香川会場：高松市歴史資料館 [平成21年1月10日～2月8日] 見学者:620名

徳島会場：徳島県立埋蔵文化財総合センター [平成21年2月13日～3月22日] 見学者:1,127名

## 共同企画展

愛媛県生涯学習センターと共催し、次の事業を共同企画し、実施した。

「弥生・古墳時代の土壇原遺跡群－生涯学習センター付近で見つかった墳墓と副葬品－」

開催場所：愛媛県生涯学習センター企画展示室〔平成 20 年 7 月 26 日～9 月 7 日〕

見学者 :130 名

## 現地説明会

発掘調査を実施した遺跡で遺構・遺物などを一般に公開する現地説明会を平成 20 年度は下記の 1 遺跡で開催した。

遺跡名	実施日	場所	参加人数	備考
北井門遺跡	平成 21 年 3 月 1 日	松山市北井門町	220 名	国・県事業同時開催

## 遺跡報告会

新居浜市教育委員会と協力して上郷遺跡の現地説明会を実施した。

開催場所：新居浜市立郷土美術館・上郷公民館〔平成 20 年 5 月 7 日～平成 20 年 5 月 11 日〕



北井門遺跡 現地説明会 1



北井門遺跡 現地説明会 2



## Ⅱ 事業報告

## Ⅱ - 1 事業の概要報告

### 調査第一係事業概要

調査第一係担当事業としては、国土交通省四国地方整備局の委託を受けた発掘調査4件と3件の整理業務、および西条市の委託を受けた池の内遺跡の報告書作成であった。

#### [発掘調査]

松山河川国道事務所管内の調査は、平成17年度から継続実施している今治道路の経田遺跡と、昨年度から開始した下経田遺跡、および松山外環状道路の北井門遺跡において行われた。経田遺跡における過年度調査の成果は、主に弥生時代中期と古代(8世紀)、中世(13・15世紀)であったが、今年度調査区の北端からは古墳時代後期(6世紀)の竪穴建物が一部重複した状態で9棟検出された。この建物群を取り囲むように溝が検出されており関連が注目される。また、過年度調査区では当該期の遺構はほとんど検出されていないことから、集落の南端が明らかになったと考えられる。隣接する下経田遺跡では、経田遺跡で検出されていた弥生時代後期と古墳時代後期の流路の延長を確認した。弥生時代の流路には外来系土器の混入もみられる。また古墳時代の竪穴建物は経田遺跡で検出された箇所から距離を隔てて検出されており、集落としての単位を示している。

北井門遺跡は平成6年度から行われた調査において、弥生時代後期から古墳時代初頭の大集落が検出されている。今回の調査は西に隣接する箇所で実施された。前回調査と同様に弥生時代後期の竪穴建物などが検出されているが密集度は低い。また、竪穴建物の中から始まり40mも伸びている幅が狭く直に掘り込まれた溝からは完形の土器が多数出土しており、竪穴建物との関係が興味深い。今回の調査の最大の成果としては、縄文時代後期末から晩期初頭の埋甕が多数検出されていることであろう。歯の一部が残存しているものもあり、一般的な理解にたてば埋葬施設と考えられるが、在り方にいくつかの分別が可能であり、次年度調査区での広がりとともに興味深い。

大洲河川国道事務所管内の調査は、平成18年度から継続している中津倉城跡と、平成17年度に実施された岩倉城跡の2次調査である。中津倉城跡では土塁の調査を実施し、隣接する堀切との構築関係を精査し調査を終了した。岩倉城跡の調査区は山頂の郭から東に延びる尾根の下方に当たり、稜線上に連続する郭が存在している。大きな調査成果としては、稜線上の郭に登るための階段や門などの入り口施設が検出されたことである。また、中世では珍しい竪穴状遺構も検出された。

#### [整理作業]

今治道路の経田遺跡の整理作業では、古代と中世の掘立柱建物が集中している区域の建物復元を中心に作業を進めた。川之江三島バイパス関連の下石床遺跡と宮ノ上遺跡の報告書を作成した。特に下石床遺跡では鎌倉期の掘立柱建物跡などが復元された。東予地方でも香川の県境に近い場所での中世の建物跡はほとんど検出例がなかったが、新たに比較する資料を得た。松山インター関連の北井門遺跡の報告書作成では最終的なレイアウト作業などを行った。

池の内遺跡で最も注目されるのは古代の遺構で、掘立柱建物と少数の竪穴建物が検出されており、一次調査区でも同様の遺構が検出されている。遺跡の位置は南海道に隣接していると推定され、これらの建物跡は官道と何らかの関連があると考えられる。  
(調査第一係長 中野良一)

### 調査第二係事業概要

調査第二係では、愛媛県より委託を受け、発掘調査5件、整理作業7件を実施し、そのうち5件について発掘調査報告書を刊行した。また、昨今の雇用情勢の悪化に対処するために県が実施した緊急雇用対策事業の一環として、愛媛県教育委員会より教育委員会所蔵の出土品について、その活用における利便性を高めるための再整理事業を受託し実施した。

## [ 発掘調査 ]

実施したのは、今治市国分の国分壱町地遺跡・国分向遺跡 2 次調査、松山市石手 5 丁目の石手村前遺跡、同市道後町 1 丁目の道後町遺跡 3 次調査、同市此花町の此花町遺跡、同市北井門 4 丁目の北井門遺跡 3 次調査の 5 件 6 遺跡についてである。

国分壱町地遺跡では微高地から谷へ向かう斜面に廃棄された弥生時代前期前半の遺物が出土した。出土遺物は層位的に一括性の高い資料と評価できるもので、今治平野においても当該期の遺跡は決して多くはなく、土器編年の指標となる貴重な資料である。

国分向遺跡は、平成 14 年度に実施した 1～3 区に続く、4 区の調査を 2 次調査として実施した。2 次調査では古代の竪穴建物をはじめ、溝や土坑などを多数検出するとともに、調査区の北端で自然流路を検出し、集落のエリアを限定し得る資料を得た。本遺跡は伊豫国分寺の直近に位置するが、寺院に直接関連する遺構は検出していない。しかしながら、遺構・遺物の時期は 9 世紀から 16 世紀におよぶものであり、国分寺とまったく無関係に存在していた集落とも考えられない。

石手村前遺跡は東西約 112m の範囲の調査を実施したが、西半分は自然流路に当たっていて遺構は検出できなかった。東半分では次第に標高が高くなるとともに土坑や柱穴などを検出し、東に存在する石手寺に接近するほど、遺構密度が高くなる傾向が窺われる。西半分の自然流路から出土した遺物にも緑釉陶器や赤色塗彩土師器などが含まれており、上級階層の居住域が近隣に存在する可能性を示すものである。本遺跡は石手寺と湯築城跡の中間に位置しているが、この地域ではこれまで発掘調査例は皆無であった。次年度以降も石手寺へ向かって調査を延伸する予定となっており、14 世紀以降、伊予の中心地であった当地区の歴史を知り得る調査成果が期待される。

道後町遺跡は、平成 11・12 年度に実施した 1 次・2 次調査に続く 3 次調査である。調査場所が愛媛県最大の観光名所である道後温泉の玄関口である伊予鉄道後駅前であったため、当センターとしては設立以来初めての夜間調査を実施した。今回の調査区は 1 次調査から数えて第 34 区となる。調査では主として 16 世紀後半の遺構・遺物を検出した。また、調査区北端では池の護岸施設と考えられる石垣を検出し、現在は足湯やからくり時計が設置されて道後温泉街のエントランスとなっている放生園がある場所にかつて存在していた放生池の南端を確認し、道後町遺跡の北限を特定した。

此花町遺跡は石手川右岸に立地する。主として古代の遺構・遺物を検出した。従来、石手川右岸では、まず最も北側の高地に持田町 3 丁目遺跡や道後町遺跡など縄文時代晩期から弥生時代の遺跡が営まれ、石手川の離水にともなって、段階的に南の低地へ生活領域を拡張し、最も南に位置する此花町や新立などの低地は近世になって開発が始まったという開発モデルが描かれていた。今回検出した遺構や遺物はこうした仮説を覆す新たな発見であり、土地開発が北の高地から南の低地へと明快な単純モデルではなかったという事実を示す貴重な発見と評価できる。

北井門遺跡 3 次調査では縄文時代後期末から晩期初頭にかけてと弥生時代後期末の二時期の集落を検出した。弥生時代の集落は、従前より当地域に一大集落が存在していたことが明らかとなり、それらに関連するものである。注目すべきは縄文時代の遺構・遺物である。当該期の資料は全県的にも極めて希少であるのに加え、竪穴建物や土坑などの遺構とその出土遺物の遺存状態は至極良好で、土器編年はもとより、当時の生活を復元する上で極めて貴重な成果を得た。

## [ 整理作業 ]

平成 7 年から 13 年にかけて発掘調査を実施した今治市の杣田池田遺跡、平成 20 年度に発掘調査を実施した新居浜市の上郷遺跡、平成 19・20 年度に発掘調査を実施した今治市の一本松遺跡、今年度発掘超を実施した松山市の石手村前遺跡、平成 14 年度と 20 年度に発掘調査を実施した国分向遺跡、20 年度に発掘調査を実施した国分向遺跡について本格的に整理作業を行って報告書を刊行した。

平成 20 年度に発掘調査を実施した道後町遺跡・此花町遺跡については整理作業をほぼ完了し、平成 21 年度早々に報告書を刊行する予定となっている。

北井門遺跡については平成 21 年度も引き続き発掘調査を実施することから、平成 20 年度は出土遺物の洗浄・注記・復元などの基礎整理作業を、発掘調査と並行して実施している。

(調査第二係長 眞鍋昭文)

## 普及啓発事業概要

### 『埋蔵文化財保護思想の普及』

衣山事務所内で展示を行うとともに県内外の各機関に協力し、センターの事業を県民各位に知っていただくため様々な活動を行っている。

### 〔考古資料特別展〕

四国内埋蔵文化財 5 団体による「発掘へんろ」も一期 5 年の最終年度を迎え、「遺跡にみる国際交流」をテーマに当センターからも朝鮮半島製の弥生時代の鉄斧や古墳時代の陶質土器、平安時代の中国製陶磁器などを展示した。

センター 1 階の展示室で開催する遺跡速報展「いにしへのえひめ '08」は今年度、前後 2 期に分割し、前半には発掘調査報告書を刊行した 15 遺跡の出土資料を「調査報告書編」として展示、後半は発掘調査を実施した 8 遺跡の出土資料を「発掘調査編」として展示した。下半期はテーマ展として「時代のものさしー古代ー」を行い、「土器のうつりかわり」と「律令体制下の伊豫（古代官衙と役人）（古代の産業）（古代寺院）」として 7 世紀後半から 10 世紀前半の土器の展示や硯・木簡・蔵骨器・陶磁器など官衙関連施設から出土した遺物を展示した。

昨年度から開始した愛媛県生涯学習センターとの共済事業の展示では生涯学習センター付近で見つかった墳墓と副葬品を展示した「弥生・古墳時代の土壇原遺跡群」を開催、ギャラリートークやコミュニティ・カレッジ「愛媛の埋蔵文化財講座」に職員を派遣した。

### 〔発掘調査現地説明会〕

国道事業と県道事業を近接して実施した北井門遺跡において実施し、縄文時代後期末から晩期の竪穴建物や墓地、弥生時代の溝の中に置かれた土器などを調査現場で紹介した。

### 〔埋蔵文化財展示会〕

当センターが調査を担当した遺跡の出土遺物や遺構写真などを県内外の資料館の要請により貸出を実施、また、現地説明会を実施できなかった上郷遺跡について調査終了後、新居浜市教育委員会の協力を得て公民館等で展示会・遺跡解説会を実施した。

### 〔その他の事業〕

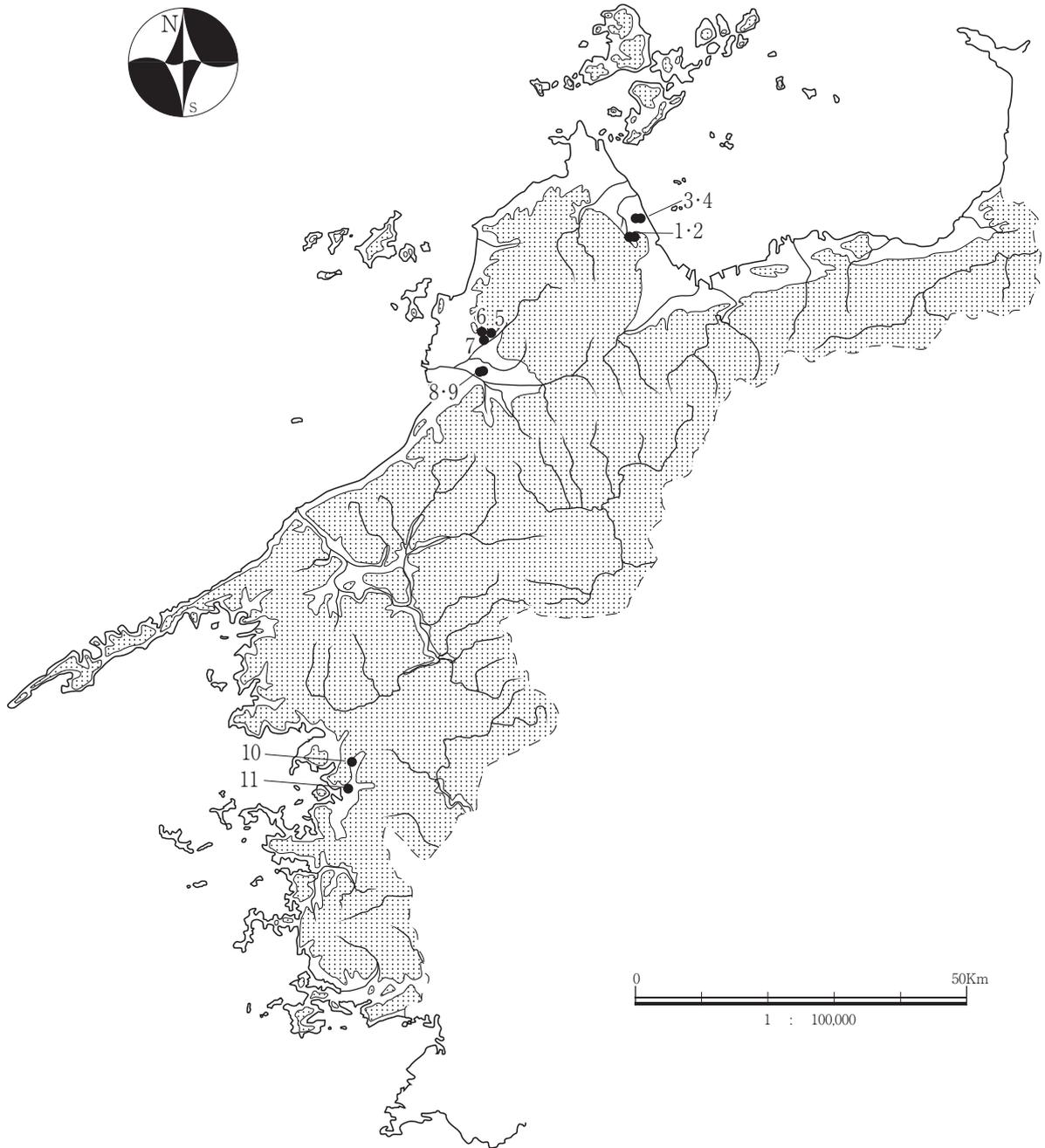
出版社への資料提供や職員による原稿執筆、市町による関連講座・遺跡整備や調査への職員派遣や指導助言、整理作業への中学生の職場体験学習の受け入れなどとともに、今年度は職員への市町からの文化財審議委員就任依頼が 2 件あったことが特筆事項である。

### 〔各種刊行物の発行〕

年報は順調に刊行したが、紀要についてはセンター設立からの 30 年に及ぶ調査によって解明できたことできなかったこと、また新たな疑問などを抽出すべく検討を重ね、次年度にはまとめ上げることができる状況となっている。

(調査課長 岡田敏彦)

## Ⅱ - 2 発掘調査を実施した遺跡及び県有出土品整理事業の概要



平成 20 年度埋蔵文化財調査位置図 ( 番号は各遺跡概要に付した番号に対応 )

# 1. 朝倉下<sup>あさくらしも</sup> 経田遺跡<sup>きょうでん</sup>

- 1 所在地 今治市朝倉下甲 327 ほか
- 2 所属時期 弥生時代中期末～古墳時代後期
- 3 調査期間 平成 20(2008) 年 11 月 4 日  
～平成 21(2009) 年 3 月 25 日
- 4 調査面積 2,550m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 一般国道 196 号今治道路建設
- 6 担当者 中野良一 松村さを里 村上才一  
深川範人
- 7 調査概要



位置図

本遺跡は、今治平野南東部に流れ込む頓田川の中流域左岸に位置し、東に笠松山、北に霊仙山といった山塊に囲まれた谷底平野の旧自然堤防上(標高 31～32m)に立地する。

経田遺跡は平成 17 年度から平成 19 年度にわたって、1～3 次調査区まで調査を行っている。昨年度調査で 3 次調査区下面の遺構について一部掘削を残しており、今年度調査では、3 次調査区下面で古墳時代後期の竪穴建物群を確認した。

竪穴建物群は、調査区を北西から北東方向に向かって弧を描くように湾曲して延びる溝に囲まれた中に展開している。溝および竪穴建物は頓田川寄りの調査区外にも延長すると思われたが、確認調査の結果、河川の氾濫もしくは人為的な削平により残存していなかった。

住居と思われる竪穴建物は 9 棟が密集しており、そのうち 4 棟は重複している。竪穴建物は方形プランで、北西、北北西、北東壁にかまどを設置した建物が各 1 棟ずつ存在する。建物規模は一辺 5 m 前後から最大で 6.7 m のものがあり、主軸方向は、北西、北北西、北東の 3 方向に大別出来る。建物群の時期は 6 世紀代とみられ、今後、各建物の構築から廃絶までの時期をおさえ、同時期併存の可能性のある建物について検討をすすめた上で集落の変遷をおさえることが必要である。

古墳時代後期の集落は北に隣接する下経田遺跡にかけても広がっており今後調査を進めていく予定であるが、これらの集落は大きく一つの集落として捉えることが出来、あわせて集落研究に良好な資料と成り得るだろう。

(松村さを里)



竪穴建物群



かまどをもつ竪穴建物 (SI32)



SI36 の柱穴に収められた須恵器

あさくらしも しもきょうでん  
2. 朝倉下 下経田遺跡

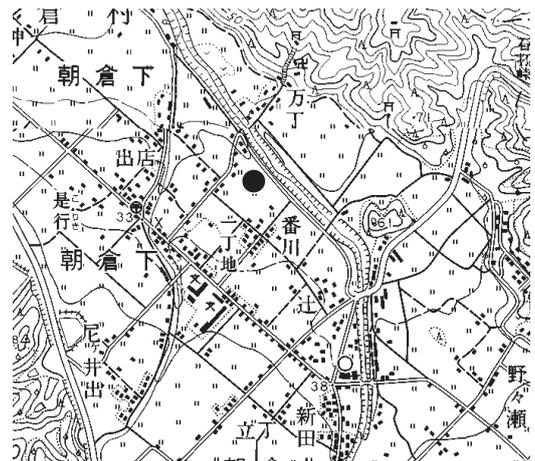
- 1 所在地 今治市朝倉下甲 307-1 ほか
- 2 所属時期 弥生時代～中世
- 3 調査期間 平成 20(2008)年 11月 4日  
～平成 21(2009)年 3月 25日
- 4 調査面積 4,850m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 一般国道 196 号今治道路建設
- 6 担当者 中野良一 松村さを里 村上才一  
深川範人
- 7 調査概要

本遺跡は頓田川の中流域左岸の標高 31 ～ 32 m に立地し、経田遺跡とは道路を挟んで北側に隣接する。

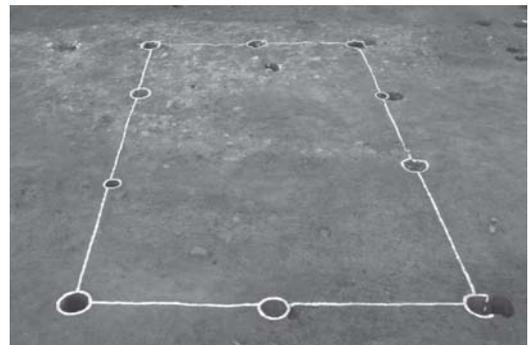
昨年度から調査を開始し、今年度は昨年度に続いて 1 次調査区 a ～ c 区を調査した。遺構面は部分的に 2 面認められ、上面で中世遺構と下面で経田遺跡 3 次調査区から続く弥生時代終末～古墳時代後期の流路を調査した。

中世の遺構は、昨年度調査とあわせて掘立柱建物 10 棟のほか土坑 8 基、溝、柱穴がある。掘立柱建物の主軸はほぼすべての建物で近似するが、若干角度を異なる 2 種に区分できる。この 2 種の建物が重複して確認されることからこの区分は時期差と考えられ、少なくとも 2 時期の建物が存在していると推察される。時期は 13 ～ 14 世紀とみられ、経田遺跡の中世集落との関連が伺われる。SK8 では中下層に礫と完形の瓦器椀、土師質土器皿が多量に入れられ、上層では小礫と割れた瓦器片、白磁片などが出土している。SK9 は石敷土坑墓で、敷かれた石は検出時にいくつか外れており、残存する範囲からみて石敷は長楕円形に配置されていたと考えられる。墓の掘方は長径 1.65m、短径 1.11m、石敷直下からの深さは 30cm を測る。SK 9 周辺には中世の建物に関連すると思われる柱穴が確認されており、屋敷墓と考えられる。

また、下面の遺構については流路 SR01 を調査した。流路方向は経田遺跡 f 地区では頓田川に注ぐ他の支流と並行して南から北に流れ、下経田遺跡では a 区中央までは同様に南から北に向かうが、そこから緩やかに反転し北西方向へと流れを変える。検出幅は約 9 ～ 10m、深さ約 0.8m、a 地区での検出長は 60m を超える。流路内からは多量の土器が出土しており、下層では弥生時代終末～古墳時代初頭の土器に限られるが、中～上層にかけては



位置図



掘立柱建物 SB5



瓦器椀が入れられた土坑 SK8



土器が大量に入れられていた流路 SR01

弥生時代終末～古墳時代初頭の土器とともに古墳時代後期の須恵器蓋杯や甕の破片が含まれる。古墳時代後期土器は、とくに最上層の黒褐色粘質土で多く出土する傾向にあり、平面的には古墳時代後期の竪穴建物群が流路の東側に展開しているが、流路内でも東側からの出土が顕著である。土層と土器の残存状況からみて流路内に激しい流水があったとは考えにくく、竪穴建物群が展開する時期には流路が溜まり状に窪んでおり、東側から土器が入れられたものと思われる。

また、弥生時代終末～古墳時代初頭の土器の出土状況についても、一部で流路の東側から投棄された状況がみられ、流路斜面に土器溜まり状に重なった堆積を示していた。これらの土器の中には、鉢のなかに小型鉢を入れ子状に納めたものがあり、何らかの意図的な行為があったものと考えられる。

弥生時代終末～古墳時代初頭の土器は、在地系土器では甕や複合口縁壺、鉢、高杯、器台や支脚があり、外来系土器も一定程度入っている。畿内系の甕、二重口縁壺、小型丸底鉢や小型器台のほか、山陰系土器や吉備系土器も存在しており、土器量も豊富であることから当該期の良好な資料と成り得るだろう。

その他流路内の出土遺物で特筆すべきは、黒褐色粘質土下層で出土した鉄器である。全長は33cmを測り、鉄剣もしくは鉄槍かと思われる。所属時期は堆積土層からみると弥生時代終末～古墳時代初頭と古墳時代後期の両方が考えられ、今後鉄器についての分析が必要である。

下経田遺跡の竪穴建物群の調査は次年度に予定しているが、流路の埋没過程と建物群との関係については調査時に改めて検討していきたい。

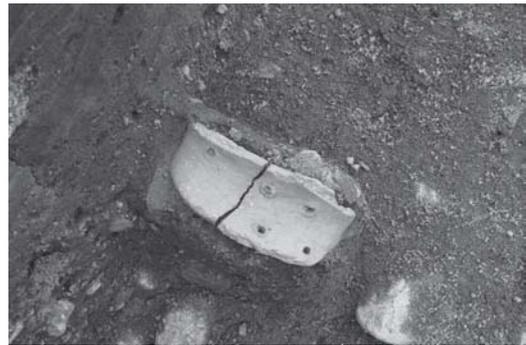
(松村さを里)



溜まり状に重なった土器 (SR01)



入れ子になった鉢 (SR01)



在地系器台の出土状況 (SR01)



鉄器出土状況 (SR01)

### 3. 国分壺町地遺跡

- 1 所在地 今治市国分6丁目  
 2 所属時期 縄文時代～中世  
 3 調査期間 平成20(2008)年10月27日  
 ～平成20(2008)年12月18日  
 4 調査面積 48m<sup>2</sup>  
 5 調査原因 県道桜井山路線改良工事  
 6 担当者 眞鍋昭文 土井光一郎  
 7 調査概要

本遺跡は、今治平野南部の唐子台丘陵南西麓に位置し、小開析谷の開口部付近に立地している。この谷からの排水は、頓田川の旧河道と考えられる大川が形成した自然堤防によって遮られて滞水し、谷の開口部付近は後背湿地が形成されていたものと考えられる。

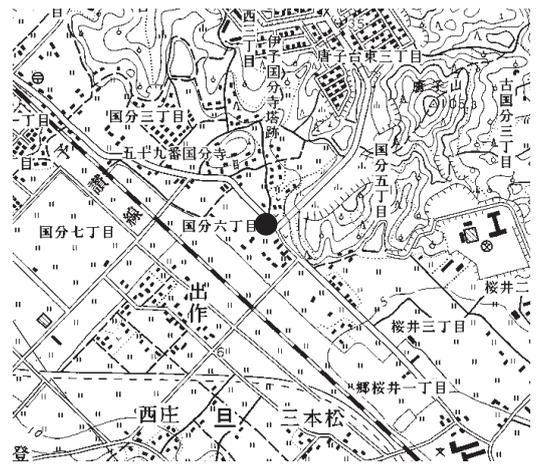
基本層序は中世以降の水田層の下位に黒褐色のシルト層(Ⅲ層)が堆積し、その下位にオリーブ黒色を呈して未分解の植物遺体を多量に含んだシルト層(Ⅳ層)を検出した。最下層は灰オリーブ色を呈する粘土混じりの粗砂層で、遺跡の基底面をなしている。Ⅲ・Ⅳ層はいずれも沼状の低湿地環境下で形成された静水堆積物であるが、Ⅲ層には瓦や土師器などの古代から中世にかけての遺物ごく少量、Ⅳ層には弥生時代前期の遺物が多量に含まれていた。

弥生時代にはすでに湿地となっていることから、Ⅲ層が形成される時期に生活空間であったことは考えにくく、Ⅲ層に含まれる古代・中世の遺物は、堆積層中に混入したものと考えられる。

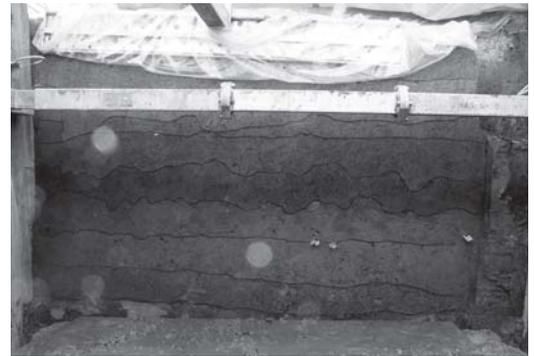
弥生時代の遺物はすべて前期前半に位置づけられるものであるが、層位的にはⅣ層とⅤ層の層界付近に集中し、平面的には北西から南東へ向かって傾斜する斜面の傾斜変換点付近を中心に分布する。こうした出土状況から、検出した遺物は斜面高位の微高地から谷へ向かって廃棄されたものと考えられる。

今回の調査は幅約3m、長さ16m程度のごく限定された範囲の調査であり、遺跡の全容が把握できたわけではないが、近隣に弥生時代前期の集落が存在することは明らかであり、将来周辺の開発によって集落の中核が発見される可能性が考えられ、今後の動向を注視したい。

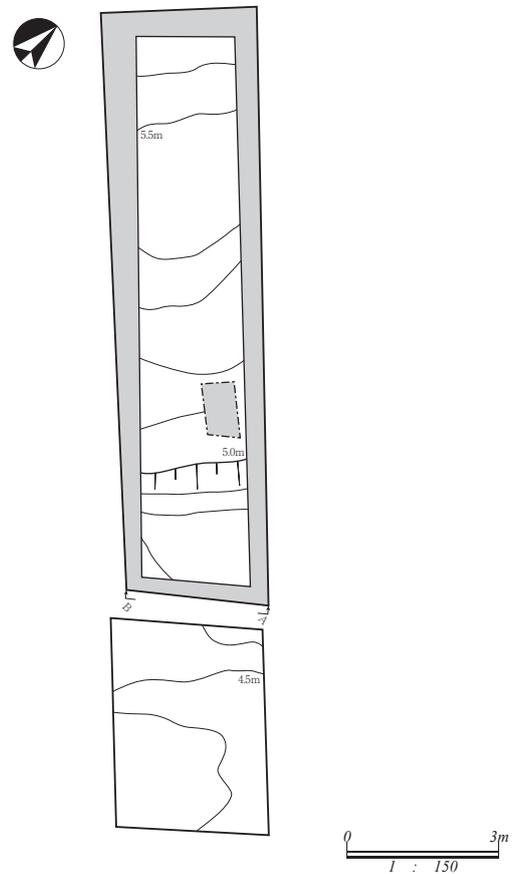
(眞鍋昭文)



位置図



基本層序



微地形図

こくぶむかい

## 4. 国分向遺跡 2次

- 1 所在地 今治市国分4丁目
- 2 所属時期 古代・中世
- 3 調査期間 平成20(2008)年10月6日  
～平成20(2008)年10月24日
- 4 調査面積 80m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 県道桜井山路線改良工事
- 6 担当者 眞鍋昭文 土井光一郎
- 7 調査概要

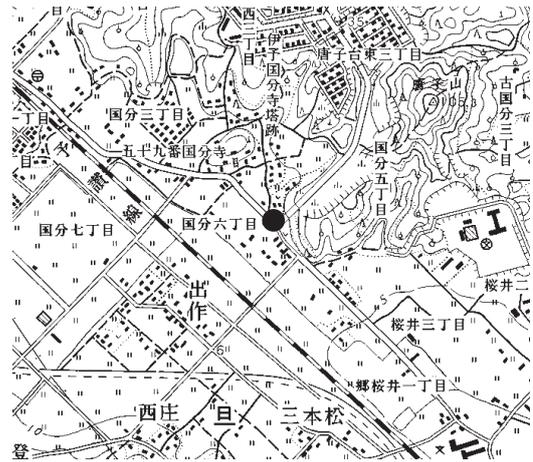
本遺跡は、今治平野南部の唐子台丘陵南西部の山麓緩斜面に位置し、本遺跡の真北250mには伊豫国分寺塔跡が存在する。今回の調査は平成14年度に実施した1次調査に続く2次調査である。

調査では古代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。検出した遺構は竪穴建物1棟、土坑4基、溝2条、自然流路1条、柱穴43穴である。

竪穴建物は出土遺物から10世紀後半頃と考えられ、四本柱を備えるが、2.7m四方のごく小さなもので、カマドなどの炊事施設を付設していない。土坑はいずれも中世の所産であるが用途等性格は不明である。柱穴も多数存在するが、調査範囲が限定的であり、具体的な建物配置を明確にするには至っていない。

調査区の北端で検出した自然流路(SR1)は、1次調査の3区で検出した流路堆積に対応するもので、SR1以北は国分壺町地遺跡付近まで低湿地であり、居住空間としての利用は難しいものと考えられることから、国分向遺跡の集落はSR1を北限とし、唐子台丘陵との間の緩斜面を生活領域としていたことが明らかとなった。

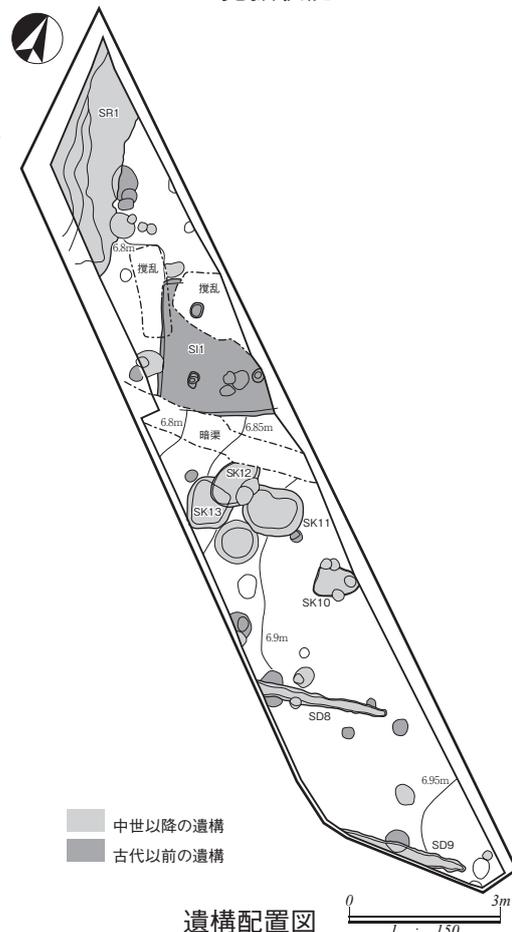
(眞鍋昭文)



位置図



完掘状況



遺構配置図

いしてむらまえ  
5. 石手村前遺跡

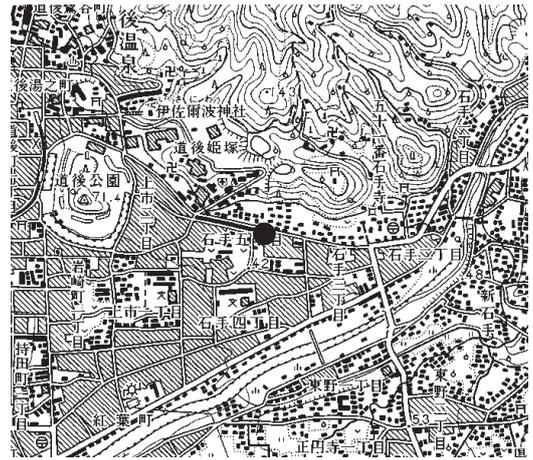
- 1 所在地 松山市石手5丁目
- 2 所属時期 古代・中世
- 3 調査期間 平成20(2008)年4月10日  
～平成20(2008)年7月28日
- 4 調査面積 340m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 県道六軒家石手線みち再生事業
- 6 担当者 眞鍋昭文 兵頭 勲
- 7 調査概要

本遺跡は、石手川扇状地の扇頂部付近に立地し、中世伊予国の政治・経済・宗教の中心地であった湯築城跡と石手寺の中間地点に位置する。

調査の結果、土坑7基、溝1条、自然流路1条、柱穴115穴などを検出し、縄文時代から中世にいたる各時期の遺物が出土した。東西約125mに及ぶ細長い調査区の西半分は14世紀代に埋積を完了した自然流路であり、14世紀以降は水田として利用されていたことが明らかとなった。調査区の東半分では、西に比べて標高が徐々に高くなり、土坑や柱穴が検出されるなど、安定した生活領域であったと考えられる。

湯築城跡や石手寺に直接的に関連するような遺構は検出していないが、自然流路からの出土遺物の中には緑釉陶器・灰釉陶器、赤色塗彩土師器、青磁・白磁、天目茶碗などが含まれていて、近隣に上級階層の居住域が存在していた可能性を示唆するとともに、平安時代に創建されたとされる石手寺との関連性が注目される。

調査は次年度以降も石手寺へ向かって延伸される予定であり、今後の成果に期待したい。(眞鍋昭文)



位置図



層序



A区完掘状況



G区完掘状況

## 6. 道後町遺跡

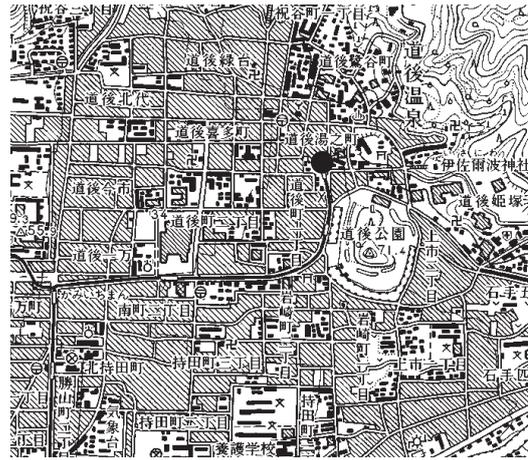
- 1 所在地 松山市道後町1丁目  
 2 所属時期 中世  
 3 調査期間 平成20(2008)年6月23日  
 ～平成20(2008)年7月11日  
 4 調査面積 111m<sup>2</sup>  
 5 調査原因 県道六軒家石手線電線地下埋設工事  
 6 担当者 眞鍋昭文 池尻伸吾  
 7 調査概要

本遺跡は、石手川扇状地上に立地し、南東に湯築城跡が、北東には道後温泉が位置している。今回の調査は道後町遺跡としては平成10・11年に次ぐ3次調査となる。

調査区は伊予鉄道後温泉駅の目の前で、調査区の北は温泉街のアーケード街、南東は足湯やからくり時計が設置された放生園で、道後温泉観光のエンタランスとなっている。この付近は道後鷺谷の谷口にあたり、宮前川との合流地点となり、1973年に埋め立てられるまでは放生池と呼ばれる沼が存在していた。

調査範囲は東西7m、南北12m程度のごく狭い範囲である。基本層序は5層(I～V層)よりなり、IV層上面で16世紀後半の土坑2基、溝3条、柱穴5穴を検出した。溝は平行してほぼ東西に延びるもので、建物に伴うものと考えられる。埋土中からは土師器杯などとともに天目茶碗が出土した。IV層中にも弥生土器・須恵器・中世土器などの遺物が含まれるが、IV層は上面に建物を造る際の造成土であり、周辺の遺物包含層を削って客土したものと考えられる。また、調査区の北端では放生池の護岸と考えられる石垣を検出している。V層以下は静水堆積物である。

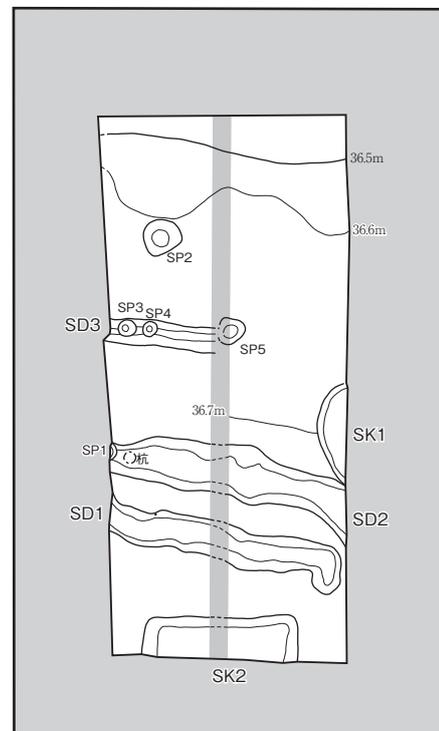
調査の結果、16世紀以前にはこの付近一帯は沼状の低湿地であり、16世紀になって造成が行われて居住域が拡大されたものの、今回の調査区付近を北限とすることなどが明らかとなった。今回の調査範囲は極めて限定的ではあるが、地域の土地開発史を明らかにする上で貴重な資料と評価できる。  
 (眞鍋昭文)



位置図



SD1 遺物出土状況



遺構配置図

このはなまち

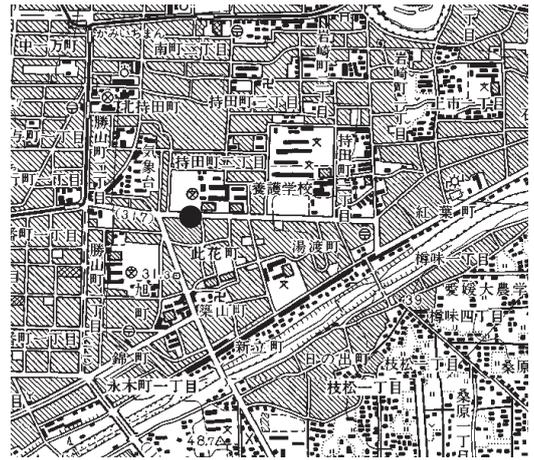
## 7. 此花町遺跡

- 1 所在地 松山市此花町 46 番地 1  
持田町 2 丁目 12
- 2 所属時期 古代・中世
- 3 調査期間 平成 20(2008) 年 4 月  
～平成 21(2009) 年 1 月
- 4 調査面積 751.715m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 (国)317 号みち再生事業
- 6 担当者 山内英樹 兵頭勲  
福山裕章 大野由美子
- 7 調査概要

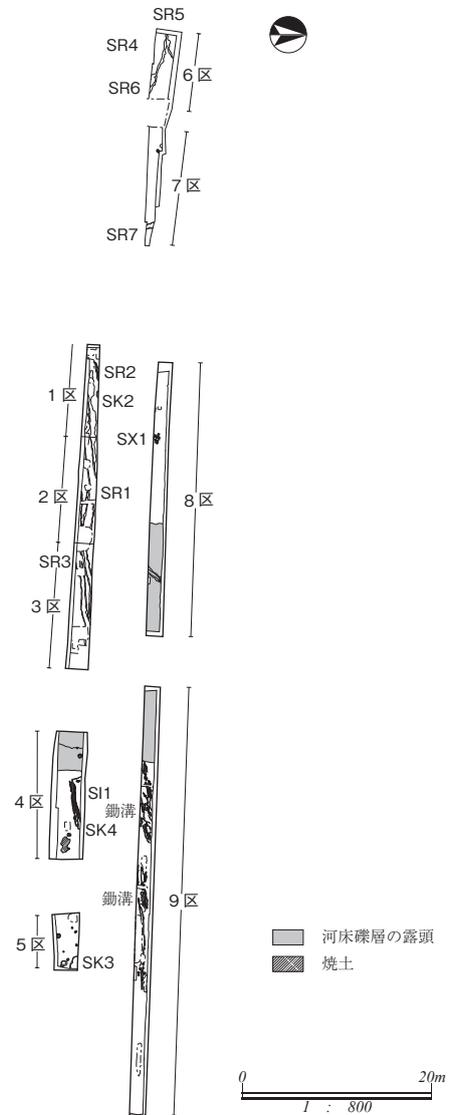
此花町遺跡は松山平野中心部の、石手川が形成する扇状地の扇央付近に位置する。遺跡周辺は北東から南西へ緩やかに傾斜するが、南北方向には石手川による河岸段丘が数段確認でき、このうち遺跡は河道が固定される直前の最低位段丘面に立地する。

調査の結果、古代から中世にかけての竪穴建物 1 棟・土杭 4 基・鋤溝 21 条・自然流路 7 条・不明遺構 1 基・柱穴 47 が確認された。東西に細長い調査区において、竪穴建物跡・土坑などの人為的遺構は南東側に偏り、調査区西側は自然流路が主体となる。竪穴建物は出土遺物から 10 世紀前後の所産と考えられる。このすぐ西には河床礫層が路頭していることから、竪穴建物跡付近は自然堤防状の微高地であったと考えられる。他の調査区でこうした状況が確認されなかったことから、微高地の規模はそれほど大きいものではなく、大規模な集落が展開していたとは考えにくい。遺跡の立地する段丘面が古代末には離水し居住空間として開発されていたことが読み取れる。また調査区西側においても、自然流路埋没後に離水したと考えられ、その上面で中世の土坑・柱穴を検出している。今回の調査は岩崎遺跡・持田町 3 丁目遺跡・道後町遺跡などで得られていた石手川右岸地域における土地開発史をより詳細なものにする重要な資料といえる。

(大野由美子)



位置図



古代末から中世の遺構配置

## 8. <sup>き たい ど</sup>北井門遺跡 2 次

- 1 所在地 松山市北井門町
- 2 所属時期 縄文時代～中世
- 3 調査期間 平成 20(2008)年 11 月 17 日  
～平成 21(2009)年 3 月 25 日
- 4 調査面積 5,032m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 松山外環状線建設
- 6 担当者 山内英樹 遠藤武 藤本清志
- 7 調査概要

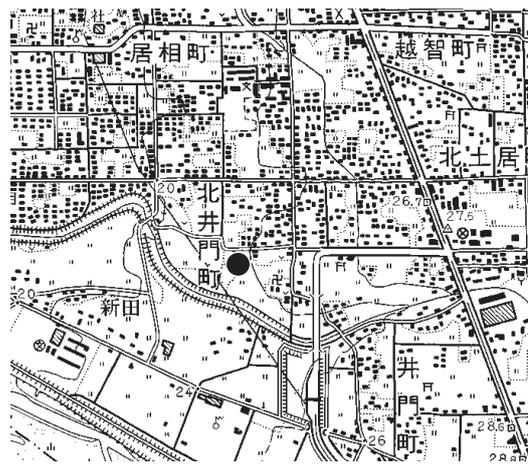
本遺跡は松山平野南部、重信川右岸で内川と合流する地点付近に位置する。昨年度より同地点での発掘調査が実施されており、今年度は継続調査である。ちなみに、隣接する県道久米垣生線関連の調査分については、「北井門遺跡 3 次」として別途報告されている。

本年度の調査は、昨年度継続分の 1 区と、東側に位置する 2 区に分かれており、調査の結果、縄文時代後期末から中世にかけての遺構・遺物が多数確認されている。以下に、調査区ごとの概要を報告する。

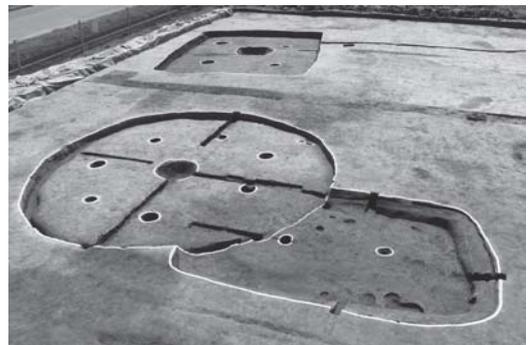
1 区では弥生時代後期後葉を中心とする竪穴建物 6 棟(昨年度分を含む)、溝 2 条、柱穴 84 穴などを確認した。このうち竪穴建物 SI 3 は、一辺 6.5 × 5.3 m を測る方形プランの竪穴建物であり、周壁溝を周囲に巡らせ、中心やや南寄りに炉を有する構造である。注目されるのは、炉に向かい溝(SD1)が延びている点である。後述するがこの溝には多量の弥生土器が検出されており、建物との関連性が注目されよう。

SI4 は径約 6 m を測る円形プランの竪穴建物である。周壁溝および 7 本の支柱穴を有しており、西側部分で小型の竪穴建物 SI5 を切る。建物床面付近からは、弥生土器に混じり各種土製品(勾玉・管玉・椅子形?・紡錘車)が出土しており、珍しい事例として注目される。なお、SI5 遺構内には焼土(被熱痕跡)および炭化物層が明瞭であり、周囲には板塀の痕跡が残り、その性格については不明な部分が多い。

SD1 は SI 3 より始まり東西に蛇行しながら約 40 m 延びており、西端部分で地形が大きく変換し溝自体は収束する。幅狭で深い溝内からは、多量の弥生土器がほぼ完形の状態で列状に検出されている。その配置状況からは、投棄・廃棄ではなく意図的に「置かれた」という印象を



位置図



1 区 SI3 ~ 5 完掘状況



1 区 SI3・SD1 完掘状況



1 区 SD1 遺物出土状況

持つものである。建物と併せた埋没過程を詳細に検討しながら、調査区の竪穴建物配置と溝との関係を検討する必要がある。

2区は大別して①縄文時代後期末～晩期初頭、②弥生時代後期、③中世、の3期が確認されている。

縄文時代後期末～晩期初頭の遺構としては、土坑および土器埋設遺構が挙げられよう。土坑には方形・円形の各プランが認められ、前者が調査区西側、後者が東側に多く認められる傾向がある。中からは縄文土器片や石錘、数量的には少量ながらサヌカイト製石鏃や黒曜石(姫島など)が出土しているが、円形土坑SK8の事例では晩期の土器片に混じり歯が検出されており、墓としての機能を想定できる貴重な成果である。

同時期で特に注目されるのは、深鉢を埋設した土器埋設遺構である。埋設方法も直立(正立)のものや斜位の状態、さらには横位というように幾つかのパターンが認められ、底部が意図的に打ち欠かれている点は注意したい。遺構の性格については、類例から推測して墓(再葬墓もしくは小児埋葬)の可能性を指摘しておきたい。

弥生時代後期の遺構としては、方形プランの竪穴建物であるSI1および南北に延びるSD1が挙げられる。竪穴建物は一辺5.0×3.0を測り、床面付近からは一定量の弥生土器および石器が出土している。また、SD1は遺物こそ少ないものの、その位置関係から、居住域を区分する溝として本来機能した可能性が考えられる。

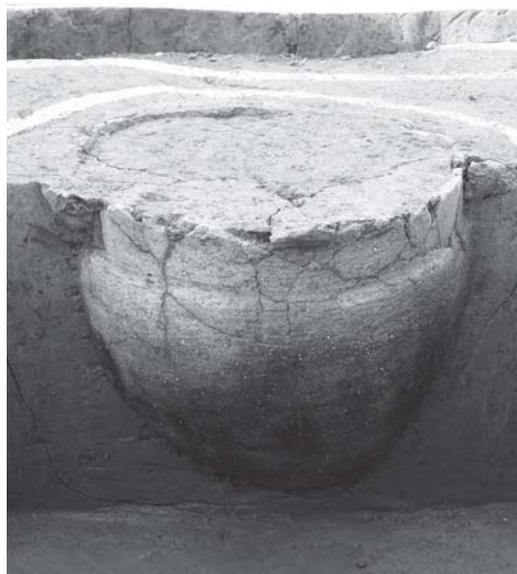
中世の遺構としては土坑および多数の柱穴が挙げられる。柱穴は掘立柱建物を形成し、出土遺物より14世紀を中心とした年代観を想定する。柱穴内には柱抜き取りに際し土師器皿を埋納した事例も見つかっている。

以上、今年度の調査で明らかになった成果は、松山平野のみならず、県内でも希少な事例として注目される。来年度継続の調査で、松山平野南部の更なる同時期の集落像が浮かび上がるものと期待される。

(山内英樹)



2区 SK8 遺物出土状況



2区土器埋設遺構



2区 SI1 遺物出土状況

## 9. 北井門遺跡 3次

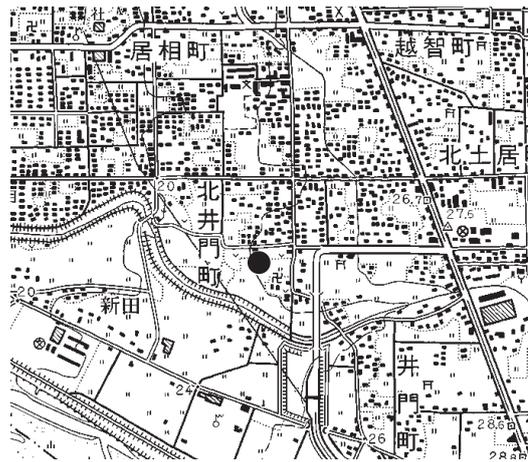
- 1 所在地 松山市北井門町  
 2 所属時期 縄文時代～弥生時代  
 3 調査期間 平成 20(2008)年 10月 17日  
 ～平成 21(2009)年 3月 24日  
 4 調査面積 1,468m<sup>2</sup>(2,840m<sup>2</sup>)  
 5 調査原因 県道久米垣生線建設  
 6 担当者 三好裕之 池尻伸吾 堀元数義  
 岡美奈子 大野由美子  
 7 調査概要

本遺跡は重信川右岸が西から北西へ向きを変え、内川と合流する地点付近に存在する遺跡で、北から南へ階段状に形成された重信川河岸段丘の低位段丘面に位置し、内川によって形成された自然堤防上に営まれている。調査地の周辺には、約 200 棟もの竪穴建物を擁し、弥生時代から古墳時代にかけての大規模集落である北井門遺跡をはじめ、井門 I 遺跡・井門 II 遺跡・西石井遺跡・石井東小学校構内遺跡・東石井遺跡など、多くの遺跡が存在している。

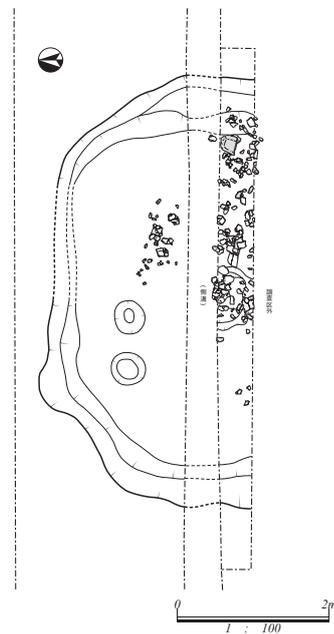
北井門遺跡としては 3 次調査にあたる今回の調査は、調査対象地が分散しているため、1 区～5 区を設定して行った(このうち 4 区は、昨年度北井門遺跡 2 次調査の 1 区として行った調査区の北側部分にあたる)。基本層序は水田耕作に由来する土壌である I 層、上部に遺物を内包する黄褐色を呈するシルトである II 層、内川あるいは重信川の河床礫層と思われる III 層からなり、II 層上面において竪穴建物 2 棟、溝 2 条、流路 2 条、土坑 9 基、柱穴 91 穴、埋没谷 1 を検出した。以下、主たる遺構について述べる。

SI2 は 2 区の南西部で検出した竪穴建物で、検出面からの深さは約 0.5m を測る。南半部が調査区外に続いたため全体像は定かではないが、平面形はやや不整形な円形を呈し、検出部での最大径は約 5.7m を測る。床面は若干の凹凸がみとめられるもののほぼ水平で、周囲に部分的ではあるが周壁溝と思われる浅い掘り込みがみられる。付帯施設はほぼ中央に炉と思われる土坑を検出した。遺物は縄文時代後期から晩期の深鉢や浅鉢、扁平打製石斧・石棒といった石器が出土している。

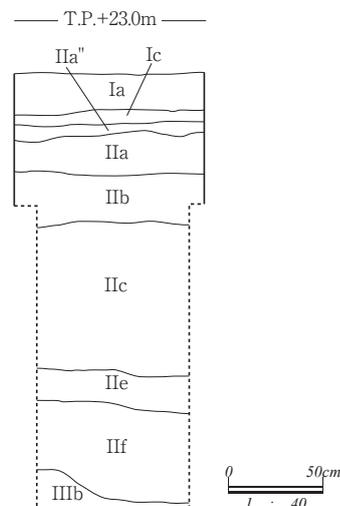
SD3 は 1 区の西部で検出した溝である。平面形はほぼ南北方位に沿う方向で、両端とも調査区外へ続く。



位置図



竪穴建物 (SI1) 検出状況



基本層序

検出部の延長は約9m、最大幅は約3.4mを測る。7層に分層できる埋土はいずれもシルトを主体とするもので、遺物は甕・鉢・壺など、完形に近いものも含む弥生時代後期後半の土器が大量に出土している。その出土状況から一括廃棄によるものと考えられる。

埋没谷は1区の北西～南東にかけて検出した。検出部の最大幅は約20m・深さは最深部で約2.1mである。埋土は大きく5層に分層できる。最終埋没層である黒褐色を呈すシルト層は、北井門遺跡3次調査全体でみられる5世紀中葉から6世紀前半の古墳時代の包含層である。次の層は黄灰色を呈すシルト層で、弥生時代後期の土器を含んでおり、西側のSD3が機能していた段階では安定した堆積を呈していたことがうかがえる。その下位層は縄文時代晩期末の土器を含む層と縄文時代晩期前半の土器を含む層がある。最下層は最も厚く、砂礫を主体としており、流路堆積と考えられる。土中からは縄文時代後期末～晩期前半の縄文土器が出土している。これらのことから、谷の形成時期は縄文時代後期以前であり、およそ3000～3500年かけて埋積していったものと考えられる。

1面目の調査終了後、縄文時代後期の遺物包含層であることが指摘されていたⅡ層について、各調査区の南北方向に10m間隔で任意のトレンチを設定し、第二面相当層として掘削を行った。その結果、明確な遺構は確認できなかったものの、部分的な遺物の広がりを検出した。

今回の調査では、縄文時代後期～晩期前半と弥生時代後期の遺構・遺物を検出した。特に、2区で検出したSI2は残存状態が良好、かつ年代の指標となる土器が多数出土しており、縄文時代後期末から晩期前半にかけての竪穴建物として地域の指標となりうる貴重な資料である。また、今回の調査において、東側の北井門遺跡1次調査にみられる大規模集落と西側の散在する竪穴建物を区分するような谷を検出したことは、北井門遺跡の地形的展開の考察に大きく寄与するものと考えられる。

なお、3月1日に普及啓発活動の一環として、隣接地の発掘調査である北井門遺跡2次調査と合同で現地説明会を開催し、資料の一般公開を行った。

(岡 美奈子)



竪穴建物 (SI2) 完掘状況



溝 (SD3) 遺物検出状況



1区完掘状況

## 10. 岩倉城跡 2次調査

- 1 所在地 宇和島市三間町曾根
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成 20(2008)年 10月 27日  
～平成 20(2008)年 12月 12日
- 4 調査面積 1,200m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 四国横断自動車道建設
- 6 担当者 中野良一 藤本清志
- 7 調査概要

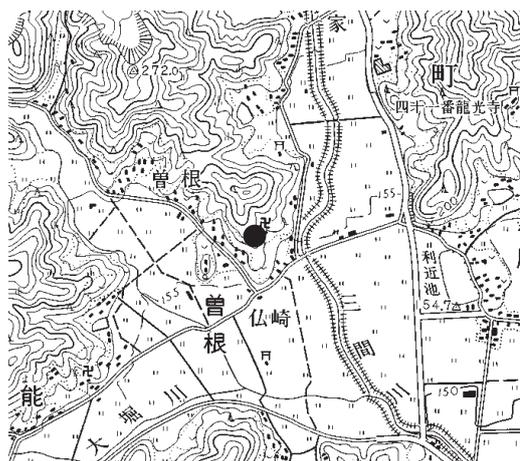
遺跡は宇和島市三間町西部に位置する。

調査の結果、郭・階段状遺構・溝・虎口・門跡・竪穴遺構・犬走り・土坑などの遺構を検出した。遺物は備前焼(甕・播鉢)・青磁碗・土師器(皿・杯)などが出土している。

郭は縄張り調査および1次調査において25郭まで確認されており、今回検出した郭7面は26～32郭とした。階段状遺構は調査区の北東部に位置し、地山を階段状に成形したと考えられる痕跡を長さ約7mにわたって検出し、平行する溝も確認できた。この階段状遺構・溝の先に郭への入り口と考えられる虎口、4本柱で構成されたと考えられる門跡を検出している。この門跡を抜けると30郭に竪穴遺構1棟が確認できた。1辺およそ2.5～3mの方形を呈し、周囲には排水のための溝を巡らせている。柱穴など上部構造を示す遺構は確認できなかったが、住居としての可能性も考えられる。中世段階の竪穴遺構は検出例が少なく、県内で4例目、南予地方においては初例であると思われる。28郭は長さ約14m、幅約1mを測り地山成形によって、平坦面を造っており、人が一人通れる程の幅で、犬走りとしての機能が想定できる。

1次調査では16世紀後半～近世にかけての遺構・遺物が確認されたが、今回は出土遺物から15世紀後半～16世紀初頭頃の城郭遺構であると考えられる。1次調査とは違う時期の遺構・遺物が確認できたことは、岩倉城跡の城域の拡大・変遷を知る上で成果は大きい。

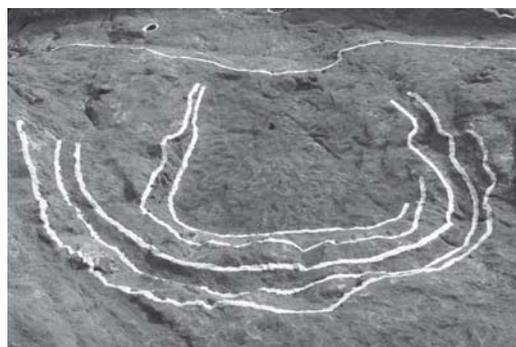
(藤本清志)



位置図



調査区全景



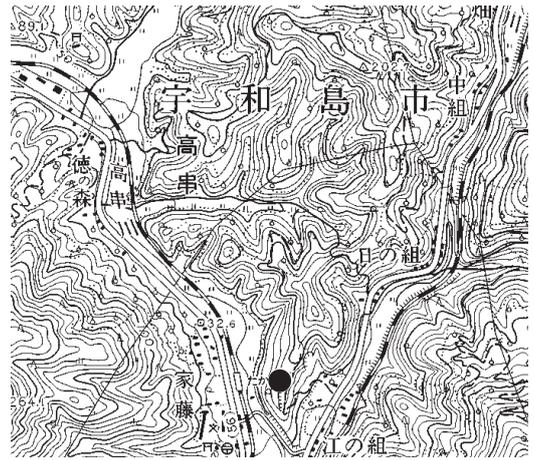
竪穴遺構



犬走り

# 11. 中津倉城跡

- 1 所在地 宇和島市高串
- 2 所属時期 中世
- 3 調査期間 平成 20(2008) 年 10 月 27 日  
～平成 20(2008) 年 11 月 7 日
- 4 調査面積 100m<sup>2</sup>
- 5 調査原因 四国横断自動車道建設
- 6 担当者 西川真美 藤本清志
- 7 調査概要



位置図

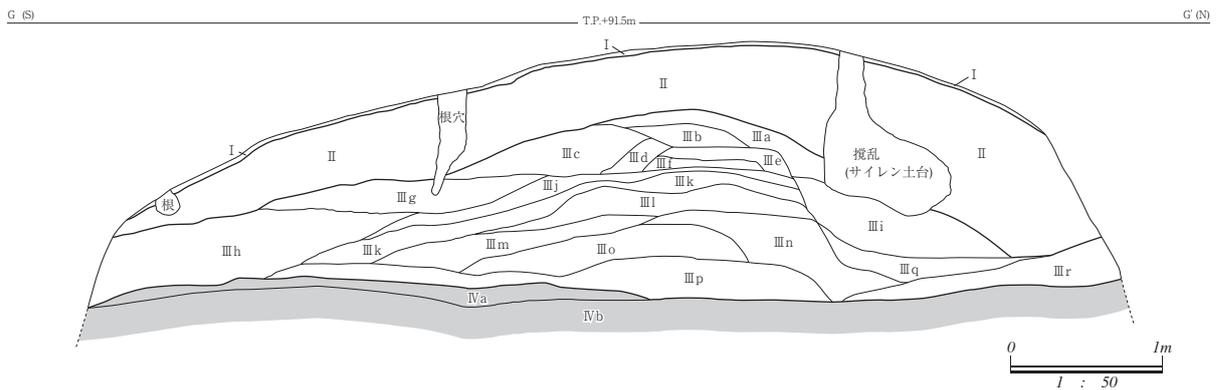
本遺跡は旧宇和島市北東部に位置し、高串川と光満川に挟まれ南に延びる丘陵部(標高約90m)に立地している。主には昨年度調査が実施できなかった土塁部分の調査である。



土塁土層断面

調査の結果、土塁の規模は高さ約1.7m、東西約30m(推定)、南北約10m(推定)を測る。土層はおおきく3層に分層でき、I層は表土層、II・III層は盛土層である。II・IIIの各層には地山である砂岩を含み、また北側をやや高く盛っており、北に隣接している堀切を掘削した際の土砂を盛土として使用したものと考えられる。またIII層は約10～20cmの厚さで黄色と褐色の土を交互に積んでいる状況が確認できた。土塁除去後に土塁下から遺構は確認できず、土塁盛土中からの遺物の出土もなかった。また地山を平坦にするなど、明確な地山成形の痕跡も確認できなかった。

(藤本清志)



層名	色調	Munsell	土質	備考
I	明黄褐	2.5Y7/6	腐葉土	表土
II	明黄褐	10YR5/4	砂質土	3~10cm大の砂岩
IIIa	にぶい黄褐	10YR6/4	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
IIIc	褐	10YR4/4	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III d	橙	7.5YR6/6	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を多量に含む
III e	にぶい黄褐	10YR5/3	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III f	にぶい黄	2.5Y6/4	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III g	黄褐	2.5Y5/4	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III h	明黄褐	2.5Y7/6	砂質土	1~10cm大の砂岩
III i	明黄褐	2.5Y6/6	砂質土	1~15cm大の砂岩

層名	色調	Munsell	土質	備考
III j	明黄褐	10YR5/6	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を多量に含む
III k	黄褐	10YR4/3	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を少量含む
III l	にぶい黄褐	2.5Y5/6	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III m	黄	2.5Y4/3	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III n	オリーブ褐	2.5Y3/3	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III o	暗オリーブ褐	2.5Y4/6	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III p	オリーブ褐	10YR4/3	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を含む
III q	にぶい黄褐	2.5Y5/4	砂質土	1~5cm大の砂岩・小礫を多量に含む
III r	黄褐	2.5Y4/4	砂質土	1~2cm大の砂岩・小礫を少量含む
IV a	オリーブ褐	10YR7/6	砂岩	地山
IV b	明黄褐		砂岩	地山

土塁土層断面図

## 県有出土品整理事業

- 1 調査期間 平成 21(2009)年 2月 16日  
～平成 21(2009)年 3月 30日
- 2 調査原因 緊急雇用対策
- 3 担当者 土井光一郎
- 4 事業概要

本事業は、緊急雇用対策として愛媛県教育委員会文化財保護課が県有出土品整理事業を立ち上げ、当埋蔵文化財センターが事業を受託し調査員一名と作業員4名で県有出土品のAランク対象遺物(報告書掲載遺物)について、衣山保管施設「北棟」より「南棟」への移動および再配置を行った。また、併せて衣山保管施設「北棟」において、Aランク以外のB～Dの各ランク対象遺物(報告書未掲載遺物)についても整理及び再配置を実施した。

事業の成果として、衣山保管施設「南棟」でのAランク対象遺物集中管理により、愛媛の各地区(東予・中予・南予)の三地区に大別整理されているので利便性が高まった事が挙げられる。

また、衣山保管施設「北棟」においても各地区や近接する遺跡毎で整理を行っているために、県内外の研究者で報告書未掲載遺物の検索閲覧に若干なりとも寄与するものと考えられる。  
(土井光一郎)



遺物移動状況 1



遺物移動状況 2



遺物移動状況 3



遺物収納状況 1



遺物収納状況 2

## Ⅱ－3 刊行した報告書の概要

本年度は別表にまとめたように第149集から第154集までの計6冊を刊行した。刊行した報告書の概要は以下のとおりである。

### 「一本松遺跡」

今治市山口に所在する一本松遺跡の報告書である。朝倉盆地北端に位置し、多伎川扇状地扇端に立地する本遺跡では、主に弥生時代中期および古墳時代中期の遺構・遺物を検出した。特に古墳時代の遺構においては竪穴建物6棟、掘立柱建物5棟を検出している。本書では遺構・遺物の概要を整理するとともに、竪穴建物群の変遷をまとめ、集落の特徴・地理的役割を提示している。

(大野由美子)

### 「石手村前遺跡」

松山市石手に所在する石手村前遺跡の報告書である。遺跡の位置は湯築城跡と石手寺の中間地点に位置する。東西に細長く設定した調査区の西半分は自然流路で、東側の石手寺側ほど標高が高く、土坑や柱穴等の遺構密度が高くなり、安定した生活領域であったことが明らかとなった。湯築城跡や石手寺に直接関連する遺構は検出されていないが、出土遺物には緑釉陶器や赤色塗彩土師器などが含まれ、近隣に上級階層の居住域が存在していたことを想起させるとともに、平安時代に創建されたとされる石手寺との関連性が注目される遺跡である。

(眞鍋昭文)

### 「池の内遺跡 2次調査」

遺跡は愛媛県の東部に展開する河岸段丘や扇状地が発達した地域にあり、調査区は飯岡台地と呼ばれる沖積堆積物に覆われた台地の縁辺部に設定された。調査では縄文時代晩期、弥生時代中期、古代(8世紀後半)、中世、近世の遺構・遺物が確認されている。主なものでは縄文時代晩期の土坑一括資料が2例確認されており、遺構からは晩期中葉の土器類や石器などが良好に認められている。

また、同時期と考えられる石棒の埋納土坑2基も確認された。これら資料は瀬戸内海沿岸における当該期の土器様式を考察する上での貴重なデータを提示したこととなった。

また、最も主たる遺構は古代の遺構群で、ここでは28棟の掘立柱建物や2棟の竪穴建物のほか、7基の溝や約60基の土坑、約600穴の柱穴が検出されている。報告書ではこれら掘立柱建物の位置づけや、官衙関連施設としての評価について検討を行った。

(多田 仁)

### 「上郷遺跡」

新居浜市郷および観音原に所在する上郷遺跡の報告書である。遺跡は新居浜東部山地北麓に開けた小規模な開析谷に立地し、縄文時代・弥生時代・中世の集落跡や古墳時代後期の古墳1基を確認した。

縄文時代・弥生時代・中世では、谷部に形成された小規模な集落跡を確認した。特に縄文時代では、新居浜市域で初例となる縄文時代晩期後半の土坑一括資料や土器埋設遺構が確認されている。古墳時代では後期に比定される円墳1基を確認しており、石室構造や副葬品配置などが明らかとなった。本書では、各期の集落跡の構成や時期を整理し、通時的な遺跡の変遷過程と周辺遺跡との関連性を

検討した。また、縄文晩期の土器群については、東予地域における編年的位置付けを明確化し、周辺地域との併行関係を整理した。(池尻伸吾)

#### 「杣田池田遺跡 2 次・3 次」

今治市杣田に所在する杣田池田遺跡の報告書である。調査は平成 7 年度及び平成 12～13 年度の 2 度行われており、今回の報告書はその成果をまとめたものである。

本遺跡は弥生時代後期から古墳時代初頭及び中世の集落遺跡である。特に弥生時代終末から古墳時代初頭の集落においては、14 棟の竪穴建物のほか、集落の北辺では土器棺墓が、南辺では多量の土器を廃棄した土器廃棄遺構が検出され、今治平野における当該期の集落の様相を明らかにする良好な資料を得ることができた。また「まとめ」では、竪穴建物の土器を形態分類し、時間的序列を整理したのち、この分類基準を基に土器廃棄遺構の土器群を分類し、遺構の時間幅を明らかにし、これら土器群の今治平野における編年的位置付けをおこなった。(西川真美)

#### 「国分寺壱町地遺跡・国分向遺跡 1 次・2 次」

今治市国分に所在する国分壱町地遺跡および国分向遺跡 1 次・2 次調査の報告書である。国分向遺跡 1 次調査については、平成 14 年度に伊予国分寺跡 6 次調査として当センターが発掘調査を実施し、平成 14 年度年報に概要を報告しているが、寺院関連遺構が存在しないことや、国分寺と直接的な関連性が認められない別の遺跡であるとの見地から、平成 20 年度に 2 次調査を実施するにあたって国分向遺跡という遺跡名に改称した。国分壱町地遺跡では弥生時代前期前半の遺物が出土した。これらの遺物は斜面に廃棄されたもので、層位的に前後の時期の混入が認められない一括性の高い遺物であり、該期の土器編年のための良好な資料となりうるものと評価できる。国分向遺跡では古代から中世にかけて断続的に営まれた集落の様相を知りうる遺構・遺物を得た。国分寺と直接的な関連はないものの、出土遺物の多くは国分寺の伽藍に用いられていた瓦である。出土した瓦の時期はさまざまで、また、井戸側に用いられるなど基本的には国分寺で不要となった瓦の再利用であることから、瓦の廃棄とその時期を正確に見定めることで、婉曲的ではあるが国分寺の動静を知り得る可能性を秘めているとも考えられる。そのほかにも緑釉や灰釉などの施釉陶器類に加え、皇朝十二銭である乾元大寶が出土するなど、ごく一般的な集落とは言い難い側面もあり、国分寺を擁する当該地域の歴史を解明する上で貴重な資料と評価できるものである。(眞鍋昭文)

平成 20(2008) 年度刊行 報告書一覧

シリーズ 番号	刊行年月	報告書名・掲載遺跡名	面積 (㎡)
第 149 集	平成 21(2009) 年 1 月	一本松遺跡 一般県道今治丹原線改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 VI -	1,140
第 150 集	平成 20(2008) 年 12 月	石手村前遺跡 一般県道六軒家石手線みち再生事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 -	340
第 151 集	平成 21(2009) 年 3 月	池の内遺跡 2 次調査 大型商業施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -	12,914
第 152 集	平成 21(2009) 年 3 月	上郷遺跡 県道新居浜東港線建設工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 -	4,500
第 153 集	平成 21(2009) 年 3 月	杣田池田遺跡 2 次・3 次 主要県道今治波方港線道路改良事業に伴う埋蔵文化財調査報告書 -	1,491
第 154 集	平成 21(2009) 年 3 月	国分寺町地遺跡・国分向遺跡 1 次・2 次 一般県道桜井山路線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 4-	803



遺跡速報展『いにしへのえひめ '08』 前期 (報告書編)



愛媛県生涯学習センター共同企画展

「弥生・古墳時代の土壇原遺跡群—生涯学習センター付近で見つかった墳墓と副葬品—」

---

え ひ め  
愛比売

－平成 20(2008) 年度年報－

平成 21(2009) 年 6 月 30 日

編集・発行 財団法人 愛媛県埋蔵文化財調査センター  
〒 791-8025 愛媛県松山市衣山 4 丁目 68-1  
TEL (089) 911-0502 FAX (089) 911-0508  
印刷 岡田印刷株式会社

---







